

まちづくり ニュース



ホームページ

<http://www.geocities.co.jp/HeartLand-Icho/3732/>

166号(鈴木博之氏追悼号)

2015年2月24日



常盤台の景観を守る会
常盤台まちづくり委員会

事務局 島田晴子 tel・fax 3960-3869

協力金振込先 郵便局00110-3-739728 ときわ台の景観を守る会

○ 鈴木博之氏来歴

- 1945年 東京生まれ。
- 1968年 東京大学工学部建築学科を卒業、大学院に進む
- 1974年 東京大学工学部専任講師となる。
- 1974年から1975年にかけて、ロンドン大学付属コートールド美術研究所に留学。東京大学工学部の助教授を経て教授に就任、建築学科にて教鞭を執る。また、ハーバード大学や早稲田大学にて客員教授も務めた。
- 2005年 紫綬褒章を受章した。
- 2009年 定年退職し、青山大学総合文化政策学部にて教授に就任。
- 2010年 愛知県犬山市にある博物館明治村の館長も務める。
- 2014年 2月3日午前8時59分、肺炎のため東京都内の病院で死去。享年68歳。同日付で、正四位および瑞宝中授章を授与された。

主な著作

- ・「建築の世紀末」 晶文社 1977
- ・「建築は兵士ではない」 鹿島出版会 1980
- ・「建築の七つの力」 鹿島出版会 1984
- ・「日本の地霊(ゲニウス・ロキ)」 講談社現代新書 1990
- ・「ヴィクトリアン・ゴシックの崩壊」 中央公論美術出版 1996
- ・「現代の建築保存論」 王国社 2001
- ・「庭師小川治兵衛とその時代」 東京大学出版会 2013
- ・「保存原論 日本の伝統建築を守る」 市ヶ谷出版社 2013 など

翻訳

- ・サマーソン著「天上の館」 鹿島出版会 1972
- ・ニコラウス・ペヴスナー 著「ラスキンとヴィオレ・ル・デュク ゴシック建築評価における英国性とフランス性」 中央公論美術出版 1990 など

常盤台の景観を守る会 常盤台まちづくり委員会の代表を永年務められた2丁目住民の鈴木博之さんが亡くなられて、早くも1年が過ぎました。亡くなってますますその存在の大きさが解ってきた気がします。今回166号は追悼号として組みました。多くの追悼記事の中から著者の了解を得て一部を転載します。

実際行動に加え、多くの著作を通じて、建築の保存や歴史の継承の重要さを訴えてきた鈴木だが、もちろん、彼が残すべきだと主張した建物のすべてを保存することができたわけではない。けれども、それまで保存されるべき建築といえば、圧倒的に江戸時代以前の建造物だったのを、近現代の建築に対しても人々の意識が向けられるために、鈴木の実した役割は決して小さくないはずだ。

復原工事の終わった東京駅は話題を呼び、駅舎の前で大勢の人々がカメラを向けるさまが見られた。鈴木の実績を振り返るうえでは、そうした成功したケースだけでなく、途中で断念せざるをえなかったケースも含め、彼が「残したもの」ばかりでなく「残そうとしたもの」全般をとらえたほうが、より多くの教訓が得られるように思う。

2020年には東京で2度目のオリンピックの開催が予定されている。ちょうどその頃が、前回、1964年の東京オリンピック開催前後に建てられた多くの建物や高速道路など建造物の耐用期限だともいわれる。否が応でも都市の更新を迫られるなかで、歴史的な建築や土地はいかに残されていくべきなのか。そのときこそ鈴木が「残そうとしたもの」に向けた経験が活かされるものと信じていたい。

“東京駅復原を実現した建築史家・鈴木博之がショックを受けた「亡者の墓」”(近藤正高)より

常盤台と、夫・鈴木博之

鈴木杜幾子

夫と私の実家はともに常盤台二丁目にある。一九七〇年に結婚して以降しばらくは他県、他区、外国など、いろいろな町に住んだが、一九八三年春、私の実家を二世帯住宅にして、今に至るまでそこで暮らしている。両親ははるか以前に亡くなり、夫も去年二月に六十八才で逝ってしまった。

八三年に戻ってから三十年、常盤台に関しては何となく私の方がつながりが強く、夫の方は半分「よそ者」という認識が私にはあった。というのは、二人とも戦前から常盤台住民の家に疎開先の埼玉県で生まれたという共通点があったものの、夫は国立大付属小学校に入って電車通学となり、それも一学期だけで、あとは父親の転勤について各地の小学校を転々とし、六年生の終わりに常盤台に戻った後、区外の中学校に進学したからである。それにひきかえ私は創立直後の常盤台小学校の（たぶん）第一回生だったので、根っからの常盤台っ子の意識が強かったのである。

小学校の六年間は長い。登下校の行き帰りや帰宅後、あちこちの道や友達の家で、ドッジボールや石蹴りや鬼ごっこをして遊んだ記憶があり、絵やピアノなどの習い事もすべてこの町の中、池袋に用足しに行く大人について常盤台から離れるのは一ヶ月に一回くらいだったような気がする。

さらにさかのぼれば、末娘だった私は、よちよち歩きの頃から母の「お使い」に連れて行かれ、前野町から駅前まで幼児には遠い道のりを歩いて、クル・ド・サックやロータリーや並木道の風景はおなじみだった。

その頃の常盤台は子供心にも美しかった。小学校の隣の公園には大谷石のパーゴラがあり、交番と駅と駅長さんの家も同じ素材でできていたような記憶がある（駅には現在でも大谷石の部分が残っているが、改修部分が多量にも実用一点張りなのが残念である。東京駅ではないが少し「復原」して、ついでに改札前の歩道を自転車禁止にし、昔の牧歌的雰囲気再現してもらいたいものだ）。

話はおどろが、私は夫にはこうした幼時や小学校時代の記憶がないだろうと勝手に思っただけで、夫と常盤台の縁を過小評価していたふしがある。だが比較的最近になって、夫が子供のころ年齢の割に自由に常盤台を動きまわっていたことを知った。一度は二歳年下の弟を三輪車に乗せてSBCレーの本社に行き、当時の社屋を「国会議事堂に似ている」と思ったという。また別のときには一人で三輪車に乗って上板橋まで行き、時計屋のウインドウの花のかたちの時計に西日が当たっているのを物哀しいような気持ちで見ているという。のちに建築史研究者になり、文学好きになった夫の面目躍如である。当時は車も少なかったし、妻が書くのも変かもしれないが、方向感覚が鋭く、判断力もしっかりした子供だったと思うので、親も自由に出かけさせていたのだろう。夫には私が思っていたよりかはるかに密度の濃い常盤台体験があったわけである。

八三年以降は娘が幼稚園・小学校から別の区に通っていたこともあって、常盤台との縁は住んでいるだけに近いものになった。スーパー・マーケットで買い物するようになって、母のように「裏」（いわゆるSB通り商店街）から「表」（駅前商店街）をめぐる必要もなくなり、好きだった大谷石の施設もほとんど消えた。中学校で都心の私立校に行くまでは心のふるさとだった常盤台はどこに行ってしまったのだろうか。たぶんそれは常盤台のせいではなく、人が大人になるというのはそういうことなのかもしれない。

鈴木さんとまちづくり運動

鈴木さんと初めてお会いしたのは、駅前マシオンについての集会在常盤台集会所で行われた時だった。「鈴木です」と挨拶されたら、どの鈴木さん？と思った程度だったが、立派な人ほど謙虚なわけで、男尊女卑の風潮に敏感な私が、一度もそういう意味でいやな思いを持ったことはない。常盤台の住民運動では陰に陽に本当にお世話になった。お忙しいのは皆承知していたので、代表だからといって余り無理なお願いはしなかったが、裁判の証人に進んで立たれたり、新年会に現れたり、できる限りは役立とうとして下さった。東京駅についての講演も、岩波の「図書」の裏表紙で御殿場で講演をなさるといふのを見つけて常盤台でも、という依頼を聞いて下さったのだ。体調の悪いのを押してのことだった。常盤台のまちづくり運動はまた新たな展開をしている。鈴木さんのご意見を聞きたいと思う。